

目的：

北米の図書館で図書館業務に従事している日本人図書館員がどのようなキャリアを経て、現在の図書館業務に従事しているかを明らかにし、パターン化することを試みる。

調査の概要：

上記の目的を達成するために以下の図書館を訪問し、聞き取り調査を行った（表 1 参照）。

表 1：日程及び調査対象館，インタビュー

日付	調査対象館	インタビュー
11 月 2 日（土）	New York Public Library, Science, Industry and Business Library	Librarian 1 名*
11 月 3 日（日）	New York Public Library, Mid-Manhattan Library	Librarian 1 名*
11 月 4 日（月）	New York University Libraries	Librarian 1 名*
	Columbia University Library	Librarian 1 名
11 月 6 日（水）	Library of Congress	Librarian 3 名, Technician 2 名, Cataloger 2 名
11 月 7 日（木）	University of Maryland Library	Manager 1 名*, Technician 1 名, Coordinator 1 名
11 月 8 日（金）	National Archives and Record Administrations	Archivist 1 名*

*日本人以外の図書館職員

調査結果（概要）：

日本人図書館職員

1) 渡米した頃から図書館に就職するまでの経緯

渡米した頃から図書館に就職するまでの経緯は以下の 3 つのパターンに分類出来ることが分かった。まず、日本で司書資格を取得した上でアメリカの図書館で働くために渡米したパターンがあり、この場合は渡米後すぐに大学院に入学し、MLS 取得後はライブラリアンとして図書館に就職して働いている。2 つ目は、自らの専門領域を学ぶために渡米し、卒業後も自らの専門性を生かすための就職先として図書館を選択したというパターンである。この場合、図書館に勤め始めた段階では MLS を持っておらず Library Technician のようなライブラリアンよりも下のタイトルからキャリアをスタートさせている。3 つ目は、プライベートな事情によって渡米し、就職先として図書館を選択するというパターンである。この場合も、初めから図書館で働くことを想定していた訳ではないので、図書館に勤め始めた段階では MLS を持っておらず Library Technician 等のタイトルから始まっていることが多かった。2 つ目のパターンと 3 つ目のパターンの場合は、上位タイトルに昇進するためには MLS が必要なので、働きながら夜間大学院や通信制の大学院で後から MLS を取得している。最後に、いずれのパターンの場合も契約職員等のポジションから安定したポジションを求めて応募・転職を経験している人が多かった。

2) 現在の図書館に勤めてからの昇進、待遇等の変化

ライブラリアンになることを目指して渡米してきた人を除いて、東アジア部門では「日本語を扱うことが出来る人」という条件で求人が出ていたので応募し、就職したという人

がほとんどであった。そこから更に昇進するには、日本人、現地人間問わずMLS及び空きポストに対して応募し採用される必要があるので、東アジア図書館に勤め始めたきっかけは日本人であるということが大きく影響していたが昇進等に当たっては、現地の人と同じように空きポストに積極的に応募したり、夜間大学院や通信制の大学院でMLSを取得したりするなど自ら行動を起こしていく必要があるということであった。

3) 日本人であることのアドバンテージと困難

日本人であることによるアドバンテージとしては、日本語を扱うことが出来るという点であるという回答が多かった。ここで言う「日本語が出来る」というのは、単に読み書きが出来るだけというだけでなく社会的・文化的な背景を含めて分かるという意味であり、それによって現地の人では難しい貴重書等におけるくずし字を読解することや、社会的・文化的な背景を含めて資料を扱うということが可能になるということであった。反対に困難なこととしては、日常会話を行うには問題ない語学力であっても、マネージメントする立場になるにはディスカッションなどの場面で不自由無く自分の意見を伝える必要があり、そこまで至るのが大変であるということであった。また、多くの機関では就労する際に市民権や永住権の保有が前提となっているという点で困難を感じるということであった。

日本人以外の図書館職員

1) 図書館に就職するまでの経緯

学部及び大学院で専門領域を学び、学んだことを生かす場所として図書館で働くことを希望してMLSを取得後に大学の就職課や指導教員の推薦によってライブラリアンとして図書館に就職したという人が多数であった。

2) 現在の図書館に勤めてからの昇進、待遇等の変化

前述のように、学んだことを生かす場所として図書館を選択しているのので、図書館で働くまでにMLSを取得しており、卒業後すぐにライブラリアンとして図書館で働くことが多かった。さらに昇進するには公募に応募し採用されなければならず、そこでは日本人との相違は無かった。

3) なぜ東アジアの資料を扱う部門にいるのか

東アジア部門で働いている現地人は、学部及び大学院修士・博士課程で日本を含めた東アジアに関する研究を行っていたので、資料に対するある程度の知識や言語を扱うことができ、それを行かす場として図書館の中でも東アジア部門を選択したということであった。

4) 東アジアの専門知識、言語能力等はどれくらい必要だと考えるか

東アジアに関する資料を利用する人の多くが、東アジアの国々に関する研究をしている人が多く、それに対応するためにライブラリアンとしては東アジア部門の扱う資料に対する知識、資料の価値等を理解していることが必要であるということであった。一方で、東アジアと言っても言語や社会的・文化的な背景が大きく異なるので、全ての言語を流暢に話せることまでは求められていないが、扱う国々の言語や社会的・文化的な背景を理解しつつ資料を扱うというのは日本人に限らず大変な点であると述べていた。